

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月24日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520837

研究課題名（和文） 変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究

研究課題名（英文） An Anthropological Study of Kinship and Family in Changing Rural Societies in Indonesia.

研究代表者

小池 誠 (KOIKE MAKOTO)

桃山学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：00221953

研究成果の概要（和文）：インドネシア調査により、スンバでは1980年代と比べて氏族の重要性が小さくなる一方、生計単位としての世帯の重要性が増したことが明らかになった。子の学歴向上のため、世帯の資源と親族や友人など社会関係を活用する生存戦略が認められる。一方カラワンの貧困地域では、世帯の収入を増やすために女性が海外に働きに出る生存戦略がみられるようになった。その場合、母方の祖母が孫を養育し、彼女らの海外移住労働を支援する。

研究成果の概要（英文）：The results of research in Indonesia reveal that households as economic units have become more important while clans have become socially less significant than in the 1980s. Some household heads fully utilize their resources and social networks, including kinship and friendship, so that their children can acquire a higher education. This is an example of their survival strategies in Sumba. A different strategy is employed in impoverished areas in Karawang to increase household income. Many women go overseas as migrant workers. To support their daughters, grandmothers generally foster their grandchildren left at home.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：家族・親族・インドネシア・社会変動・移住労働者・農村社会・生存戦略・ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

（1）文化人類学において、家族と親族の研究は長く中心的なテーマであったが、1990年代以降、マイナーな研究分野になっている。従来のような理念・規範にしばられた社会という見方ではなく、親族関係をどのように操作・活用するかという戦略を重視した研究が

注目を浴びている。研究代表者がおもな研究対象とするスンバのような父系社会でも、父系親族に限定することなく、人々が主体的かつ選択的に活用する親族関係による結びつきと、親族ネットワークは、生活の様々な局面で大きな意味を持っている。

(2) 研究代表者は、1985年から2年半、インドネシア東部の東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県において親族(「家」と氏族)と婚姻および儀礼をテーマにフィールド・ワークを実施した。2007年からは西ジャワ州カラワン県において、高速道路と日系工業団地の進出による土地買収とその後の社会変動によって大きく揺り動かされている農村に焦点を当て、調査研究を実施した。

本研究では、研究代表者が取り組んできたスンバとカラワンを調査対象として選び、これまでの調査経験を活かし、タイプのまったく異なる二つの地域社会における研究の成果を総合的に発展させようと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の主要な目的は以下の三点である。

第一に、1980年代から現在に至るまでスンバ人が体験してきた社会変動の中で、家族と親族に関し、何が変わり、何が変わらなかったのか、解明することである。世帯構成員の変化をたどり、危機的な状況にいかなる生存戦略を用いて対処しようとしてきたのか、明らかにしたい。

第二に、カラワンの調査では、土地持ち農民と小作人という階層差に留意して、急激に進行した社会変動の中で、それぞれの家族が用いた生存戦略の違いを明らかにしたい。また、親族関係が農村社会の政治構造にどのように関わっているか、また世帯構成および親族ネットワークと、出稼ぎや移住という地域社会を超えた人の移動との関連性についても解明する。

第三に、スンバとカラワンにおける調査成果を比較することで、出自と婚姻の規則の点で大きな差異があるにも関わらず、世帯の構成および家族の生存戦略、活用される親族ネットワークにどのような共通性があるのか、明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

これまでに研究代表者がインドネシアで積み重ねてきた調査成果をもとに、スンバとカラワンで文化人類学的方法を用いて、家族と親族について調査を実施する。スンバの貧困地域と先進地域から調査村落を選び世帯調査を実施し、世帯構成・学歴・職業・移動および収入・支出など家計の状況を把握し、家族の生存戦略を明らかにするための基礎的データを取得する。さらに、聞き取り調査から、今日「家」と氏族が持つ社会的意味を明らかにし、さらに村とより広い社会を結ぶ親族ネットワークの解明に努める。また、カラワンの社会変動下にある農村における家族の生存戦略を明らかにするために、聞き取り調査から家族の歴史を描き出す。最終年度は、報告書の作成に向けてスンバとカラワンにお

ける調査成果をまとめ、二つの社会の比較研究を推し進める。

## 4. 研究成果

(1) 3年度にわたるインドネシア調査の概要は以下の通りである。

2010年度は、インドネシア政府調査技術局(RISTEK)の調査許可を取得し、東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県及び西ジャワ州カラワン県において文化人類学的調査を実施した。東スンバ県ハハル郡カダハン村とウンガ村において合計100世帯を対象として、社会変動下の農村社会における家族の生存戦略を解明するために世帯調査を実施した。ハハル郡は貧困地域として知られている。世帯調査データから、農業の生産性が低く、また現金収入の手段が限られているなどスンバ独自の貧困に関する具体的な状況が明らかになった。また西ジャワ州カラワン県において農村部の家族に関する調査を実施した。とくにサウジアラビアなど海外に出た移住労働者と家族との関係について調査した。

2011年度は、これまで西ジャワ州カラワン県と東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県で進めてきた家族と親族の変化に関する調査を継続した。とくにカラワン県ラワムルタ郡で海外移住労働者とその家族について聞き取り調査を実施した。また、またバリ島でバリ在住のスンバ人に関する調査を実施した。スンバ人はもともと移動性に乏しい民族であったが、近年バリ島に働きに出るスンバ人(女性はおもに家事労働者)が増えている。ただし、カラワン県の事例と比べて、移住労働と世帯の家計との結びつきは強くないことが明らかになった。

2012年度は、「研究実施計画」に記載していないが、マルク州中部マルク県と西ジャワ州インドラマユ県を調査地として選び、家族の生存戦略と親族ネットワークに関して、比較研究のための調査を実施した。中部マルク県ハルク村でもスンバと同様に氏族が存在し、村長の選出などに際して、大きな政治的役割を有していることが明らかになった。氏族の重要性については、氏族の社会的機能が小さくなっている東スンバ県ハハル郡のケースとは異なっている。また、研究期間の最終年度であるので、最終的な成果のまとめに向けて、これまでのインドネシア調査で得た資料の整理および分析を進め、二つの社会で得た知見の比較研究を進めた。

(2) 3年間のインドネシア調査で得たデータを総合的に分析することによって、以下のような点が明らかになった。

① 東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県ハハル郡のカダハン村とウンガ村(二村は1980年代はウンガ村)では、キリスト教化と貴族層

氏族の伝統的リーダーシップの弱化により、儀礼的中心である中核村ウングで祖先祭祀（マラブ祭祀）を実施しなくなり、氏族の相対的重要性が減少した。その一方で、生計単位としての世帯の重要性が増し、家計全体のなかで子どもの教育への投資が大きな割合を占めるようになった。1980年代と比べてスンバでは教育水準が向上した。経済的に裕福でない世帯の子どもを村外の学校に進学させるために、家畜など手持ちの資源を売り、さらに親族（父系親族だけでなく妻方の親族なども）や知人を頼って下宿代を伴わない形で子を寄宿させるのは、よくみられることである。親族関係、近隣関係、そして友人関係という多様な関係性を必要に応じて使い分けて、子どもを進学させようとする世帯主の生存戦略が認められる。

氏族の重要性について東スンバ島の先進地域であるバフンガ・ロドゥ郡カリウダ村の調査からは、ハハル郡とは異なる調査結果が出ている。氏族という単位の団体性が現在まで明白に存続している。その理由として考えられるのは、水田耕作を基盤とする経済的豊かさと、それと深く結びついている貴族層の氏族を中心とする伝統的なヒエラルキーの存在である。

② カラワン県の水田を所有する農民が少ない貧困地域では、世帯の収入を増やすために、女性が海外に家事労働者として働きに出ることが当たり前になり、それが世帯の生存戦略に深く組み込まれるようになっていく。妻／母親が長期間海外に働きに出ることに伴い、母方の祖母が孫の養育に大きく関わるようになっていく。一方では、夫／父親が家計の中心であるべきという伝統的な家族観が揺らぎ、妻／母親が海外に出ている世帯では離婚に至るケースもある。

西ジャワ州では女性だけでなく、男性も海外に働きに出ている。インドラマユ県では、比較的裕福な階層から台湾に移住労働に出ている男性の事例を調査した。この男性は、台湾で稼いだ収入を世帯の生存戦略のために使うのではなく、イスラーム的福祉活動に充てて、自身の社会的地位を高めている。

③ 西ジャワ州のカラワンなどスンダ人の社会では、スンバにあるような父系親族集団（氏族）は存在しない。とはいえ、スンバ社会、とくに調査対象であったハハル郡の村では氏族の重要性が小さくなった結果、核家族または直系家族から構成される世帯が、大きな役割を果たすようになっていく。その点では、カラワンとスンバで共通性が認められるようになった。また、両地域において、祖母が孫を一時的に養育することが一般的であり、それがカラワンでは、妻／母親の海外移住労働をサポートする役割を果たしている。ただし、カラワンと比べて、スンバの世帯構

成は、付帯成員（孫や高齢者など他の世帯から加わった親族）を含む頻度ははるかに高く、このような世帯の融通性の高さがスンバ社会の特徴の一つである。

（3）国内外ともに人類学における親族研究では、氏族とリネージという単系親族集団を対象とした研究が中心的な地位を占め、家族／世帯の研究はあまり進められてこなかった。とくにスンバ島を含む東部インドネシアの諸社会の研究では、親族集団および婚姻と縁組が中心的な研究テーマとなり、家族／世帯の実態を解明しようとする研究は皆無に近かった。その点で、ジャワ島の農村社会における家族／世帯との比較の視座をもってスンバ社会に取り組んだ本研究の意義は大きいといえる。

（4）本研究では、地域社会内部だけでなく、地域を超えて広がる親族ネットワークが果たす社会的な役割の解明も研究目的の一つであったが、その点については十分な調査ができなかった。親族ネットワークが、農村部から都市部への出稼ぎや海外移住労働という地域社会を超えた住民の移動と、どのように関連しているか明らかにすることが、今後の重要な研究課題である。カラワンとスンバにおける、これまでに得た研究成果の蓄積を十分に生かして、この問題に取り組みたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 小池誠、インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——家族圏再考、比較家族史研究、査読有、27号、2013、pp. 7-26
- ② 小池誠、インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究、桃山学院大学総合研究所紀要、38巻1号、2012、pp. 27-48
- ③ 小池誠、台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク、国際文化論集（桃山学院大学総合研究所）、46号、2012、pp. 1-31
- ④ 小池誠、インドネシア・カラワンにおける日系工業団地進出と周辺農村社会に生きる家族の変容、南方文化、査読有、37輯、2010、pp. 45-59

〔学会発表〕（計2件）

- ① 小池誠、インドネシア・スンバの父系社会における「家族」の多様性——家族圏再考、比較家族史学会研究大会、2011年11月5日、桃山学院大学
- ② 小池誠、Ekonomi Rumah Tangga dan

Peranan Jaringan Kerabat dalam Menghadapi Kemiskinan di Masyarakat Sumba Timur, NTT  
(インドネシア語による発表：東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ社会の貧困問題における世帯経済と親族ネットワークの役割)、Seminar PMB-LIPI (インドネシア科学院社会文化センター・セミナー)、2011年3月22日、インドネシア・ジャカルタ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小池 誠 (KOIKE MAKOTO)  
桃山学院大学・国際教養学部・教授  
研究者番号：00221953

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：